

〔第21回 学術集会テーマセッション4〕

慢性疾患の子どもとその家族を支える復学支援

岐阜聖徳学園大学 安城更生病院 元川崎医療福祉大学

大見サキエ 高橋佐智子 森口 清美

今回、10年間実施してきた復学支援の活動経過とシステム化に向けての取り組みを紹介し、今後の課題について討論した。

大見は、2005～2014年までの10年間、小学校、中学校の教員や管理職、養護教諭、特別支援教育コーディネーターなどを対象に地元の医療機関の協力を得て、小児がんに関する研修会を教育委員会に働きかけ、実施してきた。その結果、教員はがんの子どもと家族の理解が深まり、教員の役割や学校での支援体制構築の必要性を理解してきたことを報告した。また、2007年度から退院時の調整会議を母親の希望を調べた上で実施し、患児・家族の復学時の不安軽減に効果があったことも報告した。

学校のクラスメートが病気の子どもの理解することは、復学支援を行う際、重要であるが、今回、大見が考案した小学生低学年から活用できる白血病の病気の説明と注意事項を書いた小冊子を提示し、ツールの活用可能性を検討した上で、子どもたちへ

の啓発活動を推進する必要があることを発表した。

また、院内学級転校手続き（小学生・中学生）の手順がわかる医療者向けのツールを提示した。今後は、医療者に対する教育支援の必要性を啓発すると共に、どの病院でも教育支援が取り組めるような医療者向け教育支援ツールの開発も必要であることを発表した。

高橋は、安城更生病院での復学支援の取り組みを紹介した。安城更生病院では、白血病の子どもの入院初期から、前籍校の先生方も含めて、復学を見据えた支援会議を行っている。活動を始めた時の看護師の戸惑いだけでなく、活動による子どもへの効果、活動を継続するための工夫も報告した。

会場からは、具体的な支援の方法（例・学籍移動時の手続き）や家族への支援等について質問があり意見交換した。このような活動が身近で実施されているとは思わなかったとの意見もあり、さらに広報していく必要性を感じた。参加者30名であった。